

書籍発行の実態からみた日本における「押し花」の普及

豊増加代子^{2,3}・松尾英輔^{1,3,4}

¹九州大学大学院農学研究院 812-8581 福岡市東区箱崎 6-10-1

²現 (株)クリエイト 841-0062 佐賀県鳥栖市幸津町 923-3

³現 園芸福祉研究会 818-0192 福岡県太宰府市 5 条 4-16-1

⁴現 東京農業大学農学部 243-0034 神奈川県厚木市船子 1737

Books on Oshibana (Pressed Flower Art) Published in Japan since 1960

Kayoko TOYOMASU^{2,3} and Eisuke MATSUO^{1,3,4}

¹Laboratory of Applied Plant Science, Faculty of Agriculture, Kyushu University
6-10-1 Hakozaki, Higashi-Ku, Fukuoka 812-8581, Japan

²Create Ltd., 923-3 Saitsu, Tosu, Saga 841-0062

³Present address : Association of Study for Horticultural Well-Being, 4-16-1 Gojo, Dazaifu, Fukuoka 818-0192

⁴Present address : Faculty of Agriculture, Tokyo University of Agriculture, 1737 Funako, Atsugi, Kanagawa 243-0034

Summary

Oshibana, the Japanese art of pressed flowers, is one of several leisure activities using plant materials. Its popularity has grown remarkably during the last two decades. This article is meant to clarify factors affecting that growth through the 201 Oshibana books published in Japan since the 1960's. Expansion of Oshibana was triggered by the introduction of calcium chloride drying in 1984, which enabled one to dry plants quickly and easily while maintaining their natural colors. This new technique stimulated high interest among women in the beauty of Oshibana (pressed flowers) and their attractive designs, which, in turn, encouraged the publication of books about it. The earliest books were written by individuals, mostly men at first, then gradually women. Oshibana societies and interest groups developed and added to the number of publications. Finally, commercial organizations, which supplied the necessary materials, created books that promoted and popularized the art form.

Key words : Oshibana art, pressed flower art, popularization, calcium chloride drying, book title, 押し花, 普及, 塩化カルシウム乾燥法, 書籍タイトル

はじめに

最近約 30 年の間に、「花好き」の人々の間では植物の花や葉を乾燥し、それらを使って作品を制作する「押し花」が盛んに楽しまれるようになった。この押し花の原点は、「押し葉」、「オシバ」といわれる、草木の葉・花・果実を新聞紙などにはさみ圧力を加え乾燥させた植物標本である(安黒, 1974; 興茂, 1981; 近藤, 1984; 柳川, 1983; ワールド・プレスフラワー協会, 1992)。広辞苑(1998)によると、花の場合には「おしばな」と呼ばれる。

一部では、乾燥したオシバが葉などに使われた例はあるが、一般市民の間で趣味的・芸術的な意味で親しまれるものではなかった。それは、「風邪を引く」という表現にも示されるように、乾燥段階やその後に褪

色し、植物標本の色彩が生花時のそれとはかけ離れたものになるからであった。したがって、それらの植物を用いた押し花を鑑賞用の押し花絵として平面の額絵に表現するという動きはほとんどみられなかった。

1966年にシリカゲルを用いた急速乾燥法が金森九郎によって発明され(金森, 1968; 安黒, 1974)、より生花に近い色彩の乾燥花が得られるようになった。これをきっかけに乾燥花を単独に観賞するだけにとどまらず、それらを用いた作品を作る動きが盛んになってきた。いわゆる、単なる標本としての押し葉、押し花ではなく、趣味性、芸術性をもった「押し花」の誕生である。佐藤達夫(1968)の言葉を借りれば、「いままで、おもに学術標本として扱われてきた押し花が、「押し花芸術」として、広く花を愛する人たちの楽しみにまで拡大されたことになる」。

この押し花の確立とその後の普及には、植物の乾燥

2005年10月12日受付。2006年2月20日受理。

技術の発展と花の色と形を生かそうとするデザインの導入に負うところが大きい(岩田, 1987; 藤田, 1999; ワールド・プレスフラワー協会, 1992)。本調査研究では、1968年から2003年までに日本で出版された、押し花に関する邦文の単行本を通して押し花普及の様相を探ることを目的とした。

まず、押し花の単行本としては、筆者が入手している149点のほかに、国立国会図書館を含めた図書館のネットワークを通して、「オシバ」と「オシバナ」で検索できる52点、あわせて201点が確認された。このほかには、押し花という書名の文学作品4点がみられたが、本文で取り上げる押し花とは直接関係がないので、調査対象から除外した。また1971年以降に出版された、単行本3点「おしば美術」(清友, 1971), 「海草おしば」(横浜・野田, 1996), 「海草おしばを楽しむ」(野田, 1998)は、いずれも本報の押し花と同じ内容なので調査対象に含めた。

前記201点の単行本について、書名、著者名、発行年度、紹介されている乾燥法、著者の性別や個人・団体の別、記された植物名を調べ、必要に応じて内容を検討しながら、押し花の普及にそれらがどのように関わっているかを探った。なお、押し花は、植物を乾燥させることと、その乾燥した植物を用いて作品を作ることの、二つの過程から成り立っている。本報では主に前者を中心として取り上げた。

1. おしばなの用語

「おしばな」を表現するのに、「押花」「押し花」「おし花」という三つの表現がある。これらの表現はどんな違いを意味するのであろうか。「押花」がはじめて書名に出てくるのは1968年に出版された「原色押花」(金森, 1968)である(第1図)。「押花デザイン」

(岩田, 1987), 「原色押花美術」(安黒, 1974), 「押花教室」(杉野, 1990), 「押花ガーデンデザイン」(岩田・金子, 2001)などの形で2003年までまんべんなく使われ、その数は68点にのぼった。

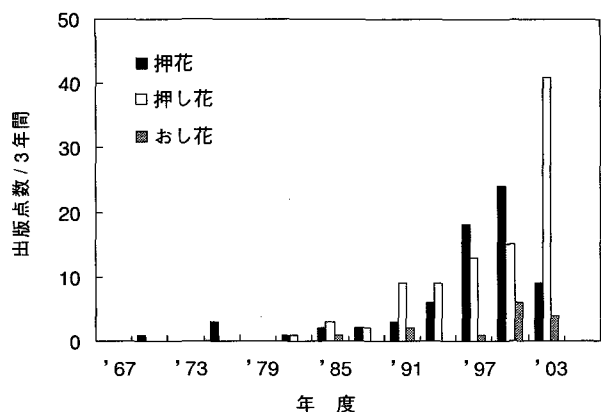


Fig. 1. Numbers of published books in relation to the expression "Oshibana" (pressed flower).

第1図. 本のタイトルにみる「おしばな」の表現と出版点数。

次に「押し花」を使った最初の単行本は1954年の「押し花」(岩淵, 1954)であるが、これは歌集であり、ここで取り上げる押し花とは関係がない。本報に関係する「押し花」の単行本は1976年の「季節をとどめる押し花づくり」(柳川, 1976)以降、27年間に105点発行されている。具体的には、「手づくり押し花の本」(黒岩, 1989), 「すてきな押し花」(ワールド・プレスフラワー協会, 1997), 「押し花と園芸福祉」(松尾・板井, 2002)などがあり、2001~03年に急増している。

以上の「押花」「押し花」いずれの場合にも、技術・デザインを取り扱ったものと、作品を紹介した作品集がほぼ半数ずつあって、両者間に目立った違いはみられなかった。これに対して「おし花」の表示は1989年「おし花ごっこ」(アロン化成, 1989)にはじめてみられ、「おし花入門」(なかせ, 1991), 「はじめてのおし花」(武広, 1998), 「カンタンおし花」(雄鶏社, 2002)など11点が2002年までに出版されているが、いずれも入門者・初級者向けのものであった。このような実態を踏まえうえて、本報では特別な使い分けが必要な場合を除いて、「押し花」を用いることにした。

2. 単行本の出版と押し花人口の推移

本稿で取り上げる鑑賞の対象とする「押し花」に関する初めての単行本は「原色押花」(金森, 1968)である。その後、1988年までの20年間には17点が出版されたにすぎなかったが、1989~91年の3年間に13点、1992~94年に19点、1995~97年には38点、さらに1998~2000年に53点、2001~03年は61点と急激に増加した(第2図)。

このような単行本の増加は、押し花人口の増加とかわかりが深いことはいうまでもない。そこで、豊増が属するワールド・プレスフラワー協会の在籍会員数の推移を3年ごとに追ってみたところ、単行本の出版点数の増加とほぼ並行して増加していた(第2図)。

以上のように、押し花が知られはじめたのは1980年代後半であるとみられるが、押し花が1983年NHK

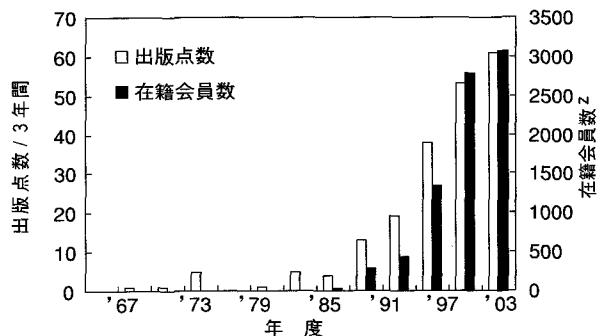


Fig. 2. Numbers of published books and of the membership belonging to a pressed flower society.

第2図. 単行本出版数(3年間ごと)の愛好者団体の在籍会員数(3年間ごと)の推移。

テレビの「婦人百科」で紹介されたこと（柳川，2000），1986年に手作りの押花電報をNTTが全国的に発売したこと（杉野，1990）などは，その後の普及をいちじるしく促進した。

また，日本放送出版協会から出版された「小さな花の押し花」(大沢，1988)，「小さな花の押し花PART-2」(大沢，1992)は，『身近な花で押し花の新しい楽しみができました』といううれしいお便りを数多くいただきました」と記されるほど評判となり，それぞれ19刷と12刷を重ねたところから，これらを通して押し花への関心がいっそう高まったことが示唆される。

いっぽう，1990年に大阪国際花と緑の博覧会に押し花が出展されたこと（近藤，1995；柳川，2001），1994年にNHKテレビ「おしゃれ工房」に取り上げられたこと（日本放送出版協会，1994）も普及にはいちじるしく貢献したものとみられる。

3. 書名を通して見た乾燥法の変遷

押し花の乾燥法としては，シリカゲルを使う乾燥法（シリカゲル法と略称）や塩化カルシウムを使う乾燥法（塩化カルシウム法と略称）がよく知られている。しかし，これらのほかにも，赤外線乾燥法（柳川，1983），電子レンジ法（アロン化成，1989；なかせ，1991），アイロン手法（柳川，1983；なかせ，1991），ゼオライト法（興茂，1981）などがあるが，これらは一般的な乾燥法とはなりえなかった。なお，シリカゲル法，塩化カルシウム法のいずれについても，乾燥容器や媒体などにさまざまな工夫と変遷がみられるが，本報では主にこれらのシリカゲルと塩化カルシウムの利用状況を取り上げた。

岩田（1987），ワールド・プレスフラワー協会（1992）などは，乾燥技術の進歩が押し花の普及に大きな役割を果たしているという。かつて新聞紙を使って乾燥していたときには，乾燥した押し花の色は，生の植物のそれとはまったく異なるものになっていた，という経験をもつ人は多い。これでは，「押し花は，そのように色が褪せるもの」と諦め，それらの乾燥植物を用いて何か作品を作ろうという意欲はわきにくい。

第二次世界大戦前の植物標本用の乾燥剤としては，急激に水分を吸収すると発熱し火傷など取り扱いに危険が生じる生石灰や潮解現象を起こしてべた付く塩化カルシウムが主に使用されていた（安黒，1976）。1966年，それらの短所をもたないシリカゲルを用い，金森が多段式急速乾燥器を開発し特許を取得している（金森，1968；安黒，1976）。これは押し花への関心を高めるきっかけになった画期的な業績ともいえよう。これによって，より生花に近い色合いを残した押し花ができるようになったからである。

このような乾燥花が得られれば，そのものを観賞するだけでなく，その色や形を生かした作品を作って楽

しもうとする意欲が生まれるのは当然であろう。その後もシリカゲル法は，塩化カルシウム法や赤外線乾燥法，紙・新聞紙法とともに乾燥法の例として紹介されているが，主な乾燥法として紹介している単行本は少ない（第3図）。

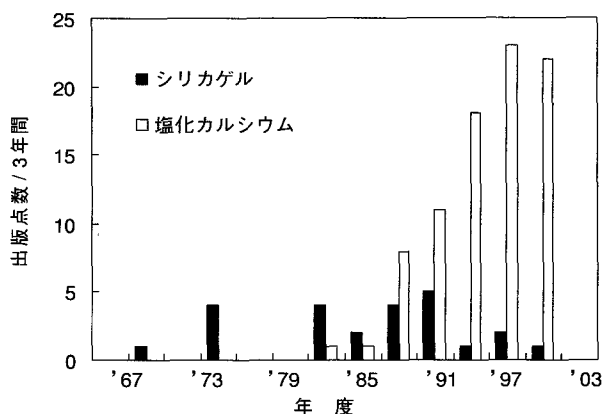


Fig. 3. Numbers of published books which mainly deal with sili-cageal drying or calcium chloride drying.

第3図. シリカゲル法と塩化カルシウム法を取り上げた単行本の出版点数。

現在のような紙・布に塩化カルシウムを含浸させる方法は，昭和初期（1934年）に高橋基生が植物標本作成法「乾燥植物標本制作用可撓成吸湿板の製造法」（特許107988号）として特許をとっていた。しかし，1984年に「特殊吸水シート」の名称（近藤，1984）で商品化されるまで実用化にはいたらなかった。その理由は，塩化カルシウムの潮解性であり，吸湿板が植物だけでなく，空気中の水分まで吸い取って取り扱いが困難になるからであった。1984年以降は，乾燥シートの外包材としてポリエチレン容器やポリエチレンシートを使うことによって，空気中の水分吸収を防ぐことができるようになり，塩化カルシウムの乾燥能力を存分に活用できるようになった。

この方法は，従来のシリカゲル法に比べると，次のような点で優れた特色をもつ画期的乾燥法であった。すなわち，1) 乾燥能力が高く，短時間で，色鮮やかに仕上げることができる，2) 乾燥後も色彩を保持できる，3) 花卉のしわや縮みができない，4) 多くの花を同時に乾燥できる，5) 乾燥用具を手軽に持ち運びできる。岩田（1999）は，塩化カルシウム法の特徴を「最もポピュラーで簡単な方法」と記している。

このような長所をもつ塩化カルシウム法は，「プレスシート」(岩田，1987)，「乾燥シート」(大沢，1988；黒岩，1989；ワールド・プレスフラワー協会，1992)，「乾燥マット」(杉野，1990)などの名で紹介され，押し花愛好家の間に急速に普及していった。これが1992年以降の，塩化カルシウム法を取り上げた単行本の急増に示されている（第3図）。そこで，シリカゲル法と塩化カルシウム法の特徴が，書名にどのような形で反映されているかをみた（第1表）。

Table 1. Descriptions related to colors or plants that were indicated in book title.
第1表. 書名にあらわれた色と植物.

年	色に関係することば ²	植物に関係することば ²
~ 1967		
1968 ~ 1970	原色	
1971 ~ 1973		
1974 ~ 1976	原色(2)	
1977 ~ 1979		
1980 ~ 1982		
1983 ~ 1985	原色(2)	
1986 ~ 1988		小さな花, 野の花
1989 ~ 1991	原色, 美しい花の色	草花, ハーブ, 野の花
1992 ~ 1994	原色(2)	小さな花, 野草, 植物のつる, やさい畑
1995 ~ 1997	美色(3), 自然の色(3)	小さな花
1998 ~ 2000	美色, 自然の色	海草(2), 野の花(3), ハーブ(2), やさい(2), くだもの(3), 野草 ガーデン, 山野草, 花びら, 野菜, 木の葉, 雑草, プライダルブーケ ¹ 野の花, プライダルブーケ, 身近な草花 ¹ , 野の草たち, 花屋さんの花 ¹ ガーデン, 小花
2001 ~ 2003	美しい(3)	

²()内は使用されている単行本の点数.

¹バラ・カラー・ユリ・コチョウラン・ガーベラなどのような大型、肉厚、八重咲き、水分の多い植物.

まず、シリカゲル法では、生に近い色彩の押し花ができることから、この長所をアピールした題名が書名にも現れ、1968~1984年にシリカゲルを用いた9点のうち4点に「原色」という言葉が使われている。1984年に塩化カルシウム法が導入されたあとも1993年までは塩化カルシウム法でも原色という言葉が使われていた。しかし、1994年以降では、「原色」という言葉はみられなくなり、「自然の色」、「美色」という言葉が多くなった。つまり、鮮やかな原色のまま乾燥させる技術があたりまえとなり、原色の確保は特筆すべきものではなくなったことがわかる。

また、乾燥能力の違いも明らかで、その能力は塩化カルシウムのほうが格段に優れている。したがって、シリカゲル法を主に使っていた1968~97年頃には、水分量が少なく乾燥の容易な「野の花」、「野草」、「草花」、「小さな花」、「ハーブ」などの言葉が書名に出てくる。しかし、塩化カルシウム法が使われるようになってからは、「やさしい畑」、「くだもの」、バラ・ゆり・カサブランカ・カラー・コチョウラン、ガーベラなどのような大型、肉厚、八重咲き、あるいは水分の多い植物を用いる「プライダルブーケ」(たなか, 2001)や「花屋さんの花」(篠田, 2001)を書名に取り上げたものが出てきた。

以上のように、シリカゲル法では身近な素材の「原色」を重視していた。そして、塩化カルシウム法では水分の多い、乾燥しにくい植物をも「自然」の生花に近い状態で「美しく」簡単に乾燥できるようになり、押し花の素材が色彩と形の両面で多様化した。

4. 押し花の発展に果たした個人と団体の役割

このような押し花の発展に大きな役割を果たしたのは、男性であろうか、女性であろうか。また、個人であろうか、団体であろうか。ここでは、単行本の著者からこれらを探った。

1970年代の単行本はほとんどが、男性によるものである(第4図)。しかし、これら男性による単行本は、1990年代になってもあまり増えず、1970年代とほとんど変わらない。1976年にはじめて女性による単行本「季節をとどめる押し花づくり」(柳川, 1976)が出版され、1990年代には女性による単行本が急速に増加し、その数は圧倒的に男性のそれを凌いでいた。この傾向は、生け花や茶の湯の発展がいずれも男性によってリードされたこと(さとう, 1998)とよく似ている。

押し花の普及にあたって、個人や団体の役割はどうなっているのだろうか。一般にものごとの普及・発展に際して、個人の力には限界がある。したがって、研究グループや団体を組織して会員を増やし、その広がりや普及の足がかりとすることが多い(金森, 1975)。

実際、押し花に関する単行本出版点数の増加につれて、押し花愛好会会員数も増加しているが(第2図)、会員の関心をさらに高めるには素材の色彩やデザインを描写する豪華なカラーページの単行本が望ましい。しかし、その出版には費用がかさみ、個人では出版しづらいことを意味する。となれば、共著や団体

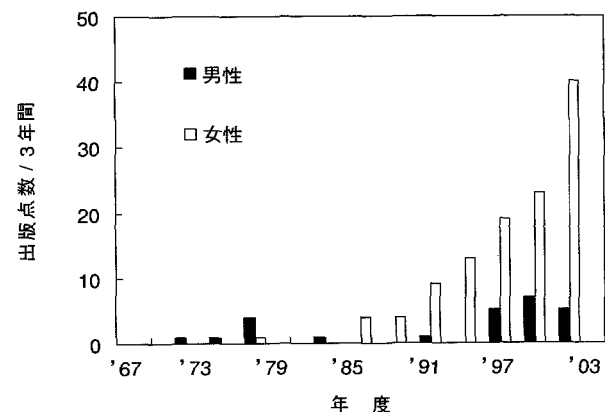


Fig. 4. Numbers of books written by male or female authors.
第4図. 著作の性別にみた出版点数.

で経費を負担しあいながら出版するという形式に頼らざるを得ないことになる。

そのような観点から、個人の編著による単行本かそれとも団体の編著による単行本かを調べた（第5図）。これによると、1970年代の単行本はすべて個人によるものであったが、1990年代になると、団体による単行本も同様に増えている。2000年代に入ると、団体による単行本の増え方は減り、個人によるものはさらに増えた。

その個人の編著による単行本も実際には、資材団体からの支援を受けて出版しているものがある。それは発行者として奥付に記載されていることからわかる。このような単行本が個人出版物のなかにどれくらいあるかをみた（第6図）。1998～2000年以降、明らかに支援を受けた出版点数が著者個人による出版点数を上回っている。

次に、団体による編著の単行本をさらに詳細にみると、二つのタイプがある（第7図）。一つは愛好者団体の指導者が編著者となり、その団体が経費を分担して出版したものである（第7図）。「原色現代押し花デザイン入門」（近藤，1984），「押花デザイン」（岩田，1987）などはその代表的な例であるが、この種の単行本はデザインを主とした作品教本で、1980年代からはじまり、2000年代まで継続している。

いま一つは、押し花資材を取り扱う団体（会社）が資材販路の拡大をはかるために出版したものである。この動きは1980年代にはじまり、1990年代になると愛好者団体を顕著に凌ぐようになった（第7図）。

図表には示していないが、この内容を見ると、大きく二つの流れを読みとることができる。まず一つは押し花の応用例の見本写真を紹介し、読者の関心を高めようとするものである。その代表的な例は、「おし花ごっこ」（アロン化成，1989），「ふしぎな花倶楽部押し花ブックPART 1」（日本ヴォーグ社，1992；1995），「四季のおし花」（原田・ブティック社，1998）である。

もう一つは、いわゆる愛好者の作品集である。この作品集では、ある程度知られるようになった押し花をさらに普及させるねらいで、資材団体が主催や後援したコンテスト・コンクールの優れた作品を紹介している。「押し絵コンクール'95 日本一の押し花の里大賞」（熊本県鹿本郡菊鹿町，1996），「第1回花いっぱい大賞押し花はがきコンクール」（第1回・押し花はがきコンクール実行委員会，1996）などはその先駆的作品集である。見本例の出版は1989年にはじまっているのに対して、作品集の出版は1990年代半ば頃からきわめて活発になってきた。

以上の事実は、押し花人口の増加ならびに普及にあたって、その資材を取り扱う団体が大きな役割を果たしたことを示している。

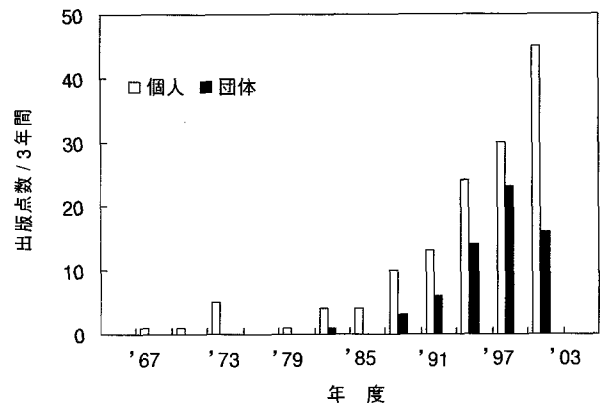


Fig. 5. Numbers of books written by individual(s) or group corporation(s).

第5図. 個人による著者と団体による著者の出版点数。

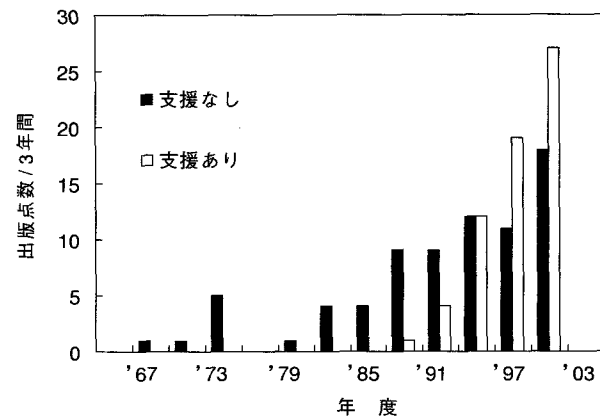


Fig. 6. Oshibana books personally published under the support of corporations.

第6図. 団体の支援を受けて出版された個人編集の単行本。

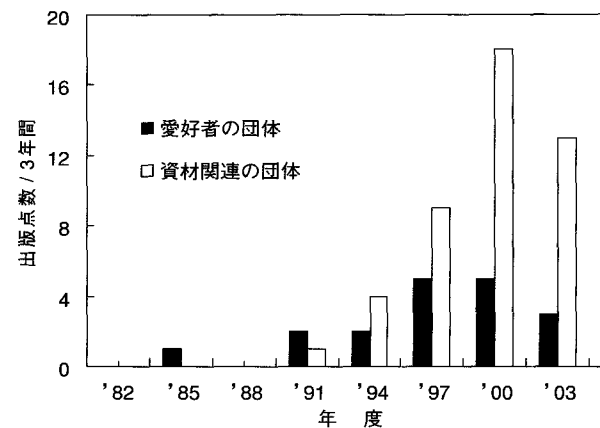


Fig. 7. Numbers of books written by Pressed flower lover group(s) or corporations which deal with pressed flower materials.

第7図. 編著にあたった団体の違いと出版点数。

謝辞

本調査研究に際し、金森九郎氏ご遺族、岩田一恵氏、長島時子氏、たたら書房、日本放送出版協会、雄鶏社、ひかりのくに社、小学館、ワールド・プレスフラワー協会関係者をはじめ押し花愛好者各位のご協力を得ました。ここに記して感謝の意を表します。

おわりに

おしばという植物標本に起源をもつ日本の押し花は、1960年代後半に趣味性・芸術性を帯びたものに変身し、1980年代後半から普及への歩みを速めた。そのきっかけは、1966年に生花の色彩を残して簡単に花や葉を急速に乾燥させるシリカゲル法の発明である。その後、1984年にシリカゲル法よりもさらに手軽で便利な塩化カルシウム法が実用化され、わずかな時間で誰でも容易に押し花ができるようになった。

これを受けてテレビ放映やそのテキストで紹介された押し花などに啓発された女性が、積極的に取り込むことになった。1998年頃からは、団体（法人）による押し花に関する単行本が押し花の愛好者を増し、市場性が增大して普及が促進された。その団体のなかでは、愛好者団体よりも、押し花資材を取り扱う団体の役割が大きかったことがうかがえる。

引用文献

- 安黒オ一郎. 1974. 原色押花美術. pp.43-46. 新樹社. 東京.
- 安黒オ一郎. 1976. 夢想式押花藝術. pp.43-44. 新樹社. 東京.
- アロン化成. 1989. おし花ごっこ. pp.46-47,56-58,60. 日本ヴォーグ社. 東京.
- 第1回 押し花はがきコンクール実行委員会. 1996. 第1回押し花はがきコンクール花いっぱい大賞. 日本ヴォーグ社. 東京.
- 藤田富美子. 1999. 富美押花画集. p.5. 祥文社印刷. 福岡.
- 原田昭子・ブティック社. 1998. 四季のおし花. pp.83-90. ブティック社. 東京.
- 岩瀨兵七郎. 1954. 歌集・押し花. 竹柏会. 東京.
- 岩田一恵. 1987. ぐらしに生かす押花デザイン. pp.33,40-41. 学研. 東京.
- 岩田一恵. 1999. 押花ブーケレッスン. pp.36-41. 誠文堂新光社. 東京.
- 岩田一恵・金子良子. 2001. 押花ガーデンデザイン 秘密の花園. 誠文堂新光社. 東京.
- 金森九郎. 1968. 原色押花. たたら書房. 米子市.
- 金森九郎. 1975. 原色押し花の作り方. pp.9-25,150-151. たたら書房. 米子市.
- 清友素心. 1971. おし葉美術. 東京おしば会. 東京.
- 広辞苑. 1998. 押し葉・腊葉. pp.372,1060. 岩波書店. 東京.
- 近藤レミコ. 1984. 原色現代押し花デザイン集. pp.4,37,44-49. あゆみ出版. 東京.
- 近藤レミコ. 1995. フラワーメッセージ 色の夢. 誠文堂新光社. 東京.
- 興茂吉亮. 1981. 四季の草花でつくる押しばな絵. pp.42-49. マコー社. 東京.
- 熊本県鹿本郡菊鹿町. 1996. 押花絵コンクール'95 日本一の押花の里大賞. 日本ヴォーグ社. 東京.
- 黒岩美穂子. 1989. 手づくり押し花の本・野の花 思い出の花で作る. pp.54-56. 主婦と生活社. 東京.
- 松尾英輔・板井修一. 2002. 押し花と園芸福祉. ワールド・プレスフラワー協会. 佐賀.
- なかせやよい. 1991. おし花入門. pp.22-25. 文化出版局. 大阪.
- 日本放送出版協会. 1994. NHKおしゃれ工房4月号. 349号. pp.32-35. 日本放送出版協会. 東京.
- 日本ヴォーグ社. 1992. ふしぎな花倶楽部 押花ブックPART1. pp.72-73. 日本ヴォーグ社. 東京.
- 日本ヴォーグ社. 1995. 押花ブックPART4. 美色押花の秘密・自然の色が残る押し方. 日本ヴォーグ社. 東京.
- 野田三千代. 1998. 海からの贈り物 海草おしば. 日本ヴォーグ社. 東京.
- 雄鶏社. 2002. 押し板・レンジで押すカンタンおし花. 雄鶏社. 東京.
- 大沢節子. 1988. 小さな花の押し花. pp.104-105,126. 日本放送出版協会. 東京.
- 大沢節子. 1992. NHK婦人百科 小さな花の押し花PART2. pp.127. 日本放送出版協会. 東京.
- 佐藤達夫. 1968. すいせんの言葉. 金森九郎(著). 「原色押花」. たたら書房. 米子市.
- さとうてつや. 1998. 花の読みかた. pp.60-61. 新潮社. 東京.
- 篠田知恵子. 2001. 花やさんの花で作る美しい押し花. pp.24-47. パッチワーク通信社. 東京.
- 杉野俊幸. 1990. 押花教室. pp.21,96. 日貿出版社. 東京.
- 武広美紀子. 1998. はじめてのおし花. pp.98-99. ブティック社. 東京.
- たなかみずえ. 2001. 押し花のブーケ. pp.5-57. 雄鶏社. 東京.
- ワールド・プレスフラワー協会. 1992. 押花. pp.2,51. 宣研. 北九州市.
- ワールド・プレスフラワー協会. 1997. すてきな押し花. 小学館. 東京.
- 柳川昌子. 1976. 季節をとどめる押し花づくり. ひかりのくに. 大阪市.
- 柳川昌子. 1983. 四季の押し花. pp.109. ひかりのくに. 大阪市.
- 柳川昌子. 2000. 暮らしの押し花. pp.80. 日本放送出版協会. 東京.
- 柳川昌子. 2001. おしゃれな押し花. pp.112. ひかりのくに. 大阪市.
- 横浜康継・野田三千代. 1996. 海藻おしば. 海遊舎. 東京.